



特 集 辞書指導と語彙指導



◎実践紹介④——『ベーシック ジーニアス英和辞典』

高校初期における辞書指導の意義



池田好成

■辞書指導の開始

私が赴任した3年前は、本校では辞書の一斉購入が実施されてなく、辞書指導もほとんど行われていませんでした。前任校では、入学式前に教科書や副教材と一緒に全員同じ辞書を購入させ、4月初めに1年生の授業担当者全員で同じ内容で辞書指導をしていました。一人ひとりの生徒が興味・関心を持って楽しそうに取り組んでいたことから、私は、この方法は英語の好きな生徒はもちろんのこと、苦手な生徒に特に効果があるとの考えを持つようになりました。そこで、「学力的に前任校と本校はさほど変わらないのに、本校では辞書を購入させていない。近隣の中学校の英語の先生方の見方を考えても、部活動の指導だけでなく進学指導にも力を入れていることを理解していただくためにも、辞書の一斉購入ができないだろうか」と本校の教員に何度か投げ掛けたのです。賛否両論はあったものの、辞書指導をすることが決まり、2年目には『ベーシック ジーニアス英和辞典』の採用が決定しました。

■『ベーシック ジーニアス』採用の理由

『ベーシック ジーニアス』は本家の『ジーニアス英和辞典』の流れを受け継いでいますが、さらに次のような点が本校英語科の教員に良い評価を与えることになりました。

①カタカナの発音表記がされていること

英語科教員のなかには、音声面でカタカナから入ることなど邪道であるとお考えの方も多いでしょう。実は私もその一人です。音声をすべて正確

に文字で表せると考えることはナンセンスだと思います。しかし、英語が得意な生徒なら発音を推測できるかもしれませんが、苦手な生徒の場合、そうはいきません。辞書は最終的に生徒自身が使っていくものであることを考えると、そのような学習の入り方もあってよいのではないかと考えるようになりました。文字だけで正確な音が出せないとしても、授業で教師が模範を示すことで、その微妙な感覚を理解して身に付けてくれればよいと考えています。

②間違いやすい例文の表示

これは『ジーニアス』の初版以来の真骨頂のひとつで、『ベーシック ジーニアス』にも取り入れられています。例えば次のような表示は、生徒にとって非常にわかりやすいものだと思います。

an exception to [×of] a rule (p. 485)

marry him [×to him, ×with him] (p. 853)

③生徒の素朴な疑問への対応

普段、生徒が学習していて何気なく感じる素朴な疑問が、「Q&A」という形でわかりやすく説明されています。例えば「Q：卵料理にはどんなものがありますか。」(p. 451)には、日常生活で私たちが目にする一般的な卵料理の英語での言い方が載せられています。これは、受験だけでなく、留学や観光で海外を訪れた時にも役立ちますし、何よりも英語に興味・関心を持ってもらう動機付けとして非常に手助けになると考えられます。

■本校の辞書指導の現状（導入期）

本校は平成12年から、それまでの普通科から単

位制の総合学科に移行しました。英語Ⅰについては、40人のクラスを入学式後の予備テスト（実力テスト・課題テスト）で成績の上位と下位の2講座に分ける習熟度別授業を展開しています。それぞれの受講人数は、下位の生徒を手厚く指導できる観点から、上位の人数を多くし、下位の人数を少なくしています。

導入期の辞書指導をするのは4月初めの10日間ほどです。クラス全員一緒に、上位と下位担当の教師のチーム・ティーチングで実施し、『ベーシック ジーニアス』準拠の『活用問題集』を使いながら進めていきます。

『活用問題集』の使い方については、まず生徒に調べさせたい単語を黒板に書き、その品詞と代表的な意味（太字になっているもの・1番目や2番目に掲載されているもの）、派生語や複数形を黒板に出て書かせ、全員に、あるいは個別に発音練習させています。担当教師によって指導の仕方に多少の違いはあり、私の場合、普段から「音読重視。授業で扱った単語や熟語、英文が読めないようでは授業を受けたことにはならない」と生徒に何度も説明していますので、辞書指導においても、1時間の授業中に、座席の列ごとに一人ひとりが最低2回はみんなの前で発音する機会を設定しています。『活用問題集』は、飽きがこないよう、多種多様な形式で作られており、生徒も楽しく使っていました。余白には教師が追加説明したことも書き込ませています。

定期テストにおいても『活用問題集』（今年度は前半部分）を試験範囲の一部とし、今年度の第1回目の定期テストでは20点分を出題しました。後半部分については、もう少し英語Ⅰに慣れた段階で使わせるのがよいと考え、9月以降の会議で使い方を検討することになっています。

■本校の辞書指導の現状（通常期）

担当者によって多少の違いはあるものの、おおむね2つのパターンに分かれています。

まず一つ目は、私もそうなのですが、授業中に辞書を引かせる方法です。私の場合、新出単語とその品詞、そして調べさせたい意味の数を書いたプリントを配って辞書を引かせます。示された数の意味を生徒に黒板に出て書かせ、その意味が本当にその語にあるのかを確認します。それから全員に、あるいは個別に発音練習をさせます。

二つ目は、予習としてノートあるいはプリントにて調べさせ、授業中に確認させる方法です。

他にも様々な方法があるかと思うのですが、どちらにしてもこれらは標準的なパターンのうちのひとつだと思います。

1年生の、特に初期の間は、「辞書に触れる」、「英語に親しむ」、「英語に興味や関心を持ってもらう」ということをねらいとしていますので、特別深く入り込んだことはしていません。

■辞書指導の必要性和問題点

現在は、教科書の進度の関係や電子辞書の普及もあって、辞書指導が非常に実施しにくい状況にあるようです。本校では幸いにそのようなことはなく、問題点は、新出単語の意味調べが予習として宿題となった時に、家庭へ持ち帰るのを生徒が面倒がる、ということぐらいでしょうか。これは、休み時間や部活動が休みの放課後を利用できれば解決できることですので、さほど深く考えることはないと思っています。

現在は教師の指示で辞書を使用していますが、勉強は本来、生徒が自発的に行うのが理想です。その過程でわからない単語に出会った時に、さりげなく辞書を引いて意味や派生語を調べられることがたいへん重要であり、その橋渡しをすることが私たち英語科教員の役割だと考えています。さらに、単なる予習や受験のためだけではなく、少しでも多くの高校生に辞書のおもしろさが伝わり、英語そのものに興味・関心を持ってもらえるならば、それ以上の喜びはありません。

（いけだ よしなり・石川県立松任高等学校教諭）